

巻頭言

メキシコとインド

水上 正史

先日、在インド大使館勤務の発令を受けました。暫く中南米とは離れることとはなりましたが、最近インド関係の本を読んだり、かつて勤務したメキシコを訪問したりして感じたことを記して、お別れのご挨拶と致したいと思います。

21 世紀に入っても未だ世界の多くの国々は、自国（民）の繁栄の多くを米国の富や繁栄とどうかかわっていくかに依存する状態が続いています。特に多くの発展途上国がそうであり、なかでも途上国から離陸せんとする国々にその傾向が強いように思われます。

例えば、メキシコです。メキシコという国が特段極端に貧しいとは思いませんが、隣にあれだけの豊かな国があると見劣りがするのは仕方がないでしょう。自然の流れとして国境を越え、より高い賃金を求めて（あるいは失業から免れるために）、より裕福な生活環境を求めて、場合によっては命を架してでも国境を越える人たちが発生することとなります。ただ、そこは後発移住者の悲哀か、先発移住者の都合により比較的簡単に入国を許されたり、時には厳しい査定を受けたりして翻弄されているのが実情です。メキシコの側から見るとひどいと思われるかもしれませんが、これは仕方がないとも思われます。後発移住者が求めている富の大半は、主に先発移住者が築いたものだからです。いずれにせ

よ、合法、非合法を問わず米国に移り住んだメキシコ人のほとんどの人たちはまっとうな仕事をしてお金を稼ぎ、母国に送金しているのです。どんな所で働いているか？特段にデータは持ち合わせていませんが、その源泉は、自動車産業などに代表される製造業にあるのではないのでしょうか。勿論、庭師や店員などのサービス業に従事しているメキシコ人は多いでしょうが、いずれにせよそうした人たちの生活を支えているのは、製造業に従事している人たちであり、即ち、間接的にも米国に働くメキシコ人の生活は、米国内の製造業に多く依存していることとなります。

ところが、最近この仕組み自体が米国の側から崩れ始めているのです。いわゆる製造業の製造現場が米国から消えているという事実です。カリフォルニア大学アービン校附属パーソナル・コンピューティング・インダストリー・センターが発表した「iPod の秘密」を引用した記事を読みました。これによると、iPod は 451 の部品が使用されていますが、その全てが米国外の委託生産となっており、全体の部品コストの約半分を占めるハード・ドライブは東芝が中国で生産している部品を、次に重要な部品コストの 14% を占めるディスプレイ・モジュールは東芝と松下電器が日本で生産しているそうです。その結果、小売価格 300 ドルの 1 台あたり、東芝は前者から約 19 ドル、東芝・松下の合併企業は約

6 ドルの利益をあげているのに対して、生産を全てアウトソースしているアップル社は約 80 ドルの利益をあげているそうです。(その他、卸業者の利益が 30 ドル、小売利益が 45 ドルと推定されています。)

このように米国から製造業の現場が消えつつあります。米国資本(米国ブランド)の製品の製造現場が米国外に移りつつあるのです。勿論その中には廉価な労働力を求めてというものもあるでしょう。しかし、そうしたものは既に米国から去っており、いまや米国内に残る産業は、製造業というよりは消費者に近いところでしか成立しない産業(とやら効率よく利益をあげることのできる金融業など)だけになりつつあるのではないのでしょうか。(因みに、06 年の米国内の企業利益に占める金融の割合は約 33%であるのに対して、製造業は 20%を切っているとのことです)

米国を離れた製造業の現場は、最終的には主要消費地である米国に物品が戻ってくる必要がある以上、米国から離れれば離れるほど競争力がなくなるという側面があります。そこにメキシコの出番があります。米国から南に出た製造業の現場は両国の国境地帯にあるいわゆるマキラドーラを中心としたものでした。その主目的は、メキシコの廉価な労働力ということになります。しかし、後にインドの例でも説明しますが、そうした事態が続くと、いずれは米国内に製造の場(力)がなくなり、単純に廉価な労働力を求めてでは事態がすまなくなってきました。そしてメキシコ内での製造業の現場が、徐々にマキラドーラ地帯から離れ、メキシコの中央部に移ってきているとすれば、実質的には米墨間の経済的国境が少しずつ下に下がってきていることを意味するのではないのでしょうか。そうなる、もはやメキシコ人にリスクを冒してまで

政治的な国境を越えて米国の繁栄に依存したりする必要はなく、自国にしながら、家族とともに過ごしつつ、米国の富を享受することが可能になり始めているのです。メキシコあるいは米国に進出する日本の企業(特に製造業)はこうした中期的な変化を視野に入れておくといえることがあるかもしれません。

実は、インドでも同じようなことが形を変えて起きています。(以下、大いに「インドの衝撃」(文藝春秋)を参考にしています。興味のある人はお奨めします。)

インドもメキシコと同様に、米国の富と繁栄をどうやったら自国の中に転換していけるかに腐心してきております。言うまでもなく、インド経済発展の原動力は IT です。では、インドでの IT 産業の実態と何でしょうか。IT そのものというよりは、IT の発展に伴って発生した色々な仕事が米国からアウトソースされた、いわば下請け仕事です。例えば 2000 年問題に対する木目の細かい対応や、米国の会計事務所が基礎ナマデータをインドに IT を通じて送付し、それをインド国内で処理して米国に戻すなどがその仕事の中身の典型です。要するにこれらの仕事はインドで行う必要のないものです。やる気になれば(あるいはそれまでは)米国内を職場として行ってきた仕事です。しかし、コストの面から(それ以外の理由は難しいかもしれませんが)“代替可能な仕事”をインドにアウトソースしているのです。このままであれば、インドは単なる下請け工場です。将来、インドよりコスト面で採算の合う場所が見つければ、製造業以上に簡単に作業場所を他国に移すことになってしまいます。インドの繁栄は極めて脆弱なものとなってしまうのですが、インドの強み、すごさというのは、この“代替可能な仕事”を通じてスキルを身につけていっ

た結果、多くの“代替不可能な（インドの特定企業以外にアウトソースが不可能な）仕事”としてしまっている点です。アウトソースの場所としてのみならず、インドでしかできない技術を造り始めています。例えば、世界最大級のジャンボジェット機、エアバス A380 の設計はインドの技術なくしては語れないそうです。この例だけではなく、日本も含め多くの先進国が、インド抜きにはもはや技術的に対応できなくなっており、単なる下請けではなくなっているのです。

では、このインドを支えているものは何か？大きく2つあります。

第一は、英語です。なんといってもインドにとって最大の顧客である米国と共通言語である英語がつかえることは強みです。英国に植民地化され色々和不愉快なこともあったでしょうが、ここにきてやっと苦勞が報われたというのが実態ではないでしょうか。これまで英語という言語のせいで、インドの優秀な頭脳が流失してしまいました。しかし今や貿易面でもいい方向に進みつつあります。（ちょっと余談になりますが、日本の場合インドとは全く逆です。英語という言語が不自由なおかげで、日本の優秀な頭脳やスキルの流出を止められたのは事実であり、輸入品の波にさらされても言語という障壁（外から見れば非関税障壁）のおかげで、国内市場を護ったのも事実です。従って、英語など国際語が不得意というのは悪いことばかりではないのです。）

インドを支えている第二の点は、理科的頭脳です。「インド式計算法」は日本国内でも話題になっています。ITT（Indian Institutes of Technology）の現状についての説明は省きます。今のインドの政策の1つは、理系的頭脳では絶対に負けないという状況をつくることにより、世界中の高度な（収益率の高い）“非

代替可能な仕事”がインドでなければできなくしてしまうことにあるのです。そのためインド政府は理系高等教育に力を入れ人材育成するとともに、今のインド・ブームの流れの中で、頭脳流出どころか頭脳環流を狙っているのです。

話をメキシコに戻しましょう。

インドの強みが英語であり理系頭脳であるとするれば、メキシコの強みは何といっても最終消費地米国に近いということです。かつてメキシコの悲劇として、「アメリカに最も近く、天国にもっとも遠い」と言っていました。そうした時代は終わりました。情報社会などともてはやされても、しょせんは最終的には食べたり着たり使ったりといった商品を手にすることが必要になり、そうしたことにお金を払う最大のマーケットは当分の間米国なのです。

米国内の動きにも注目する必要があります。自動車産業に代表される製造業で米国が栄えていた間は、そうした産業に従事するのは先発移住者で、後発移住者は、庭師、清掃人といった仕事に従事する構造でしたが、米国の富をより少ない人数で金融業などを中心に生むようになり製造業の職場がなくなると、これらの場所で働いていた人たちは、自然と今までラテンアメリカなどからの後発移住者の担っている仕事を奪いにくる（結局、移住を制限する）ことになります。また、米国の製造業の現場がメキシコに移ると別の現象も起こりうるかもしれません。米国の単純労働者や他のラテンアメリカからの労働者が仕事を求めてメキシコにやってきてメキシコ人と職場を争うという事態です。

さて、日本です。これらの構造の中で、日本もメキシコやインドと同じであることを認

識する必要があります。それは、日本の繁栄の多くやはり米国の富や繁栄とどうかかわっていくかに依存しているということです。日本には、インドでの英語といったもの、メキシコでの地理的近さという武器はありません。日本の戦後の経済的繁栄を振り返ると、その基盤は世界からアウトソースされたことに対して、きちんと対処してきたことにあります。その一つが、匠といわれる技術にあると思います。この匠の技術（大田区の中小企業のスーパー技術といってもいかもしれません）が、海外に飛散してしまうと、日本は立ち直れません。これら技術の後継が日本人の間にうまく伝達されるような科学技術教育の普及が今必要とされているのです。こうした技術を持っている人たちが不用意に英語を覚えて海外に流出しないようにすることも大事

です。また、国内でそうした後継者を育てても、それがいわゆる外国人労働者であり、身につけて技術をもって本国にいつの日か帰ってしまうということになると、その技術伝承者は国内にいなくなります。場合によっては、そうした技術伝承者は外人であっても日本に定住してもらう工夫が必要かもしれません。その意味でも、国内にいる外国人労働者にどうやって技術を伝授するのかも考える必要があります。何もアウトソースもの問題は、国境を越えてだけ起こっているのではないのです。

その意味で、メキシコやインドの知恵を学ぶことが必要とされています。

（みづかみ・まさし 在インド日本大使館公使／前・外務省中南米局審議官）

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

『ブラジルの歴史』

ボリス・ファウスト 鈴木 茂 訳 明石書店
2008年6月 544頁 5,800円＋税

サンパウロ大学で長く文明史、政治史を講じたブラジルの代表的歴史家によるブラジル通史。ポルトガル領アメリカ植民地時代から独立以降の帝政時代、第一共和国とヴァルガス政権、第二次世界大戦後の民主主義の実験、1964年から21年間続いた軍事政権を経て民主化に移行し、カルドーゾ政権を経てルーラ大統領当選に至るまでを詳述している（2005年4月に加筆）。

歴史叙述に力点を置いているが、ブラジル史の中心的なテーマ、例えば奴隷制の性格、独立後にブラジルが分裂しなかった事由、権威主義体制から民主主義への移行の特徴などの議論と著者の見解を組み合わせている。ブラジル史はともすれば、進化の過程であると捉える視点と、政治や社会に対する国家優位から起きる様々な問題が時代を通じて繰り返されてきたという「惰性」を強調する見方が多いが、著者はこれらとは反対に、時代を追って叙述することにより、同じ状況が続く現状追認がなされながら、政治、社会・経済は変化することを示そうとしている。

巻末には、部分的に異論があることを指摘した訳者解説、参考文献リスト、年表が付いている。同じ訳者・出版社による高校教科書訳『ブラジルの歴史』（2003年）という良書が出ているが、より深くブラジル史を知りたいという読者には本書とあわせ一読を薦める。

〔桜井 敏浩〕